平成二年九月一日発行（毎月一日発行）三二四号　発行／黒埼町役場　〒九五〇-一一　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三-一　電話／〇二五-三七七-三一〇一　編集／企画開発課（担当・広報統計係）　印刷／㈲博進堂　経費一部六〇円

人 75

二輪車安全運転大会で準優勝

金井（かない） 亮子（りょうこ）さん
上山田第一・二十九歳

バイクやオートバイなど二輪車には、四輪車にない独特の魅力があるようだ。あるエッセイストが、暴走族が二輪車から四輪車（衛生無害！）に転向したという話を聞いて憤った、と書いても、そうだよな、と納得できるものがある。

「暴走族」などと穏やかでない話から始めてしまったが、今回ご登場いただいたのは、まったく逆といっていい人だ。この八月四日五日、三重県の鈴鹿サーキットで開かれた第二十三回二輪車交通安全運転競技会で、準優勝した金井さんである。実は全国大会へは今年で三回目の出場で、成績は一昨年が九位、昨年は五位。

「昔から二輪車は好きだったんです。海岸線を走りたい、なんてね」という金井さんが免許を取ったのは昭和五十六年。「当時は女の人はあまり乗ってなかったし、ちょっと飛んでみたかったんですよね」と笑う。

そして、三年前、まだ山田にあった試験場で開催された大会をたまたま見に行った。並んでいるメダルを見て、大会に出ようと決心したという。「学生のころから賞状なんかには縁がなかったので、ここらで一つと思ったんです。自分がどの程度のレベルか試してみたかったってこともありますけど」。

大会での競技では、法規に則って走るだけでなく、悪路やスラロームでの運転技術を競う種目など十二種目ある。「一回しかできないから、普段できる人でも失敗したり…」

もちろん、何の練習もせず全国大会へ出ていたわけではない。試験場などのコースで一か月半くらい、交通安全協会や二輪車普及協会などの人たちの指導を受けながら週に三、四回練習した。

夫の博行さん（31歳）、長男の和也くん（3歳）と。警察官の博行さんも亮子さんも、「交通事故には運転する人それぞれが気をつけなくては」という。亮子さんはヤマハのSR250に乗っていたが、大会後は「しばらく乗らないだろう」と長岡の実家にあずけてあるとか。写真のホンダ・モンキーは博行さんの通勤用。

「ですから、まったく自分一人の力ではここまでできなかったでしょうね」と金井さん。「特に家族の協力がなければ。主人の理解があったからできたんです」。

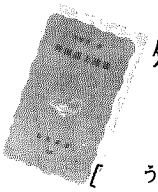
しかし、今回を最後に引退するという。「これからは、子育てに専念しなくてはと思ってますから」ということだ。

「本当は教えてもらった人たちのために優勝したいと思ってたんです。でも、考えてみれば私みたいな平均的な人間がよくやったって思います。一生懸命やればなんとかなるということでしょうか」

今後は、個人的に楽しみたい――ご主人と二人でのツーリングなど――ということだ。

「早く子供が大きくなって、後ろに乗せてあげたいと思ってるんです」という言葉はまぎれもなく子供を愛する母親のものだった。

ほんの一冊



外国語上達法

千野栄一・著
（岩波新書）

ハウツーものというと、いかがわしい感じがして毛嫌いしていたのだが、もしかすると、そのために損をしているのかもしれない、とこの本を読んで思った。確かに「外国語」の「上達法」を、文法や発音、辞書、教師などについてそれぞれコツみたいなものが書いてあるのだが、だからと言って外国語を学ぼうとは思っている人にだけ読ませておくのはもったいない。外国語を通しての外国文化の見方をも教えてくれるし、優れた（明解な、わかりやすい）日本語の文章も読める（国語の教科書に最適の文章と思うのですが）。たとえ、外国語が上達しなくても、優れた日本語の文章を読むためだけでもこの本を読む価値があると思います。（この本は町立図書館にあります）

〈人の動き〉

7月末日現在	（前月比）	〔前年同月比〕
人口	23,488	(+80)	〔+323〕
男	11,511	(+41)	〔+164〕
女	11,977	(+39)	〔+159〕
世帯	6,287	(+22)	〔+128〕

7月1日～末日

出生	21	転入	128
婚姻	7	転出	57
死亡	11		

編集室

今年の夏は暑かった。夏バテしないよう気をつけたつもりだが、それ以上に暑さの方が強かった。▼8月も末になったら涼しくなった。夏は推理小説、ということで、この夏、読もうと思ってたウンベルト・エーコの『薔薇の名前』をこれから読もうかと思う。

●今月の表紙

八月二十六日。お昼過ぎに役場へ行くと、日直が「二十四時間テレビで黒鳥のどこだかわからないけど、お染ブラザースが出て、田んぼの真ん中で募金してますよ」と教えてくれた。なに、というわけでもう一つの取材は後回しにして飛んでいく。黒鳥の農協の奥、黄金色に実り始めた稲穂の海の彼方に弥彦・角田の山なみが美しく見える場所でやっていました。でも、皆さん、すでに帰りかけていたところで、残念ながら広報に載せられるようなまともな写真が撮れなかった。そこで、たまたま募金に来ていた表紙の皆さんにご登場願ったわけです。

●来月号の表紙

九月一日で、緒立老人憩いの家・黒埼荘が十九年の幕を閉じます（八月十五日号のお知らせ版では誤って十四年としてしまいました。お詫びとともに訂正いたします）。そこで

さよなら黒埼荘

と題して、閉館間近の黒埼荘の利用者の皆さんの声をご紹介したいと思います。（この号が出るころには、取材がもう終わっているはずだ）

また、七月二十六日に、寿学級主催で「町長と語る会」がもたれました。その質疑応答の模様を来月号で取り上げたいと思います。